

入
選

— 高校生の部 —

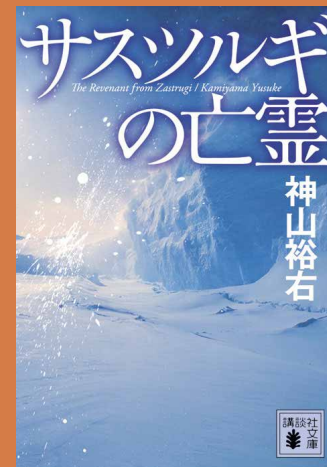
「極寒の地で起こった事件から導かれるもの」

伊藤愛深さん

推 し 本：『サスツルギの亡霊』

著 者：神山裕右

推したい相手：極寒地での、普段とは違う
ミステリーを楽しみたい方



「極寒の地で起こった事件から導かれるもの」 伊藤愛深

「サスツルギ」とは、強風が吹く雪面上に形成される模様の一つ。そんな模様ができる南極での数々の事件が鍵となり、真実に近づいていきます。極寒地での、普段とは違うミステリーを楽しみたい方に推したい一冊です。物語は、主人公、矢島拓海の元に一通の絵葉書が届くところから始まります。差出人は、南極で死んだはずの兄からでした。兄は越冬隊として南極に行っており、遭難したため遺体は見つからないままでした。後に拓海もその越冬隊に参加することになります。そこで起きる事件や、過去の出来事をきっかけに、兄の死の真相に迫っていく、というようなストーリーです。まず、本書の最大の魅力は、最初から最後まで1つの線で繋がっているということです。最初の些細な出来事から、伏線回収という形で後の出来事と辻褄が合うのです。具体的には、主人公が過去の自分の行動が、死の真相に近づくといった形です。これは南極の話なので、感情移入は少し難しいかもしれませんが、自分が過去にした後悔と、拓海の後悔を比較すれば、私のあの時の気持ちと拓海の手持ちは同じだったのかもしれない、と共感できると思います。また、ストーリー性や表現技法にも注目して欲しいです。本書の作者、神山裕右は、実際には南極に行ったことがありません。ですが、約20種にも及ぶ参考文献から、南極で実際に起こりうる事件を描いているのです。南極の殺人事件と聞いて、皆さんならどんな事件を思い浮かべますか？大量の雪で埋めて殺害？それとも寒い南極に監禁して殺害？このサスツルギの亡霊で描かれるのは、そういう単純な事件ではないんです。キャラクター同士の関係性が故に起こる事件や、違う事件が故に起こる事件など、読んでいて思わず推理したくなるようなストーリーです。また、本当に凍死してしまいそうな言い回しや、思わず自分で自己暗示をかけたくなる表現も、本書のポイントです。いつのまにか引き込まれてしまい。指が凍って足からは血が滲んでいくような、そんなふうにしてしまう1冊となっています。また、登場する昭和基地も実際に存在するため、もし行ったことがある人は、さらにドキドキしながら楽しめると思います。自分が痛みを感じるような表現技法ってどんな感

じなんだろう、伏線回収がされていく事件はどんなふうになっていくのだろう。普段行くことの無い南極でのドキドキなミステリーを楽しみたい方に、ぜひ推したい1冊です。